錦織監督　映画の現場から

●○● 48

出雲大社 遷座祭の年に思う

日本を誇りに思える作品を

以前、フラ（いわゆるフラダンス）の第一人者のカレイナニ早川先生に取材したことがあった。フラを題材に映画を撮りたいと思っていたからだが、取材を進めるうちに、私は思わず「フラって神楽に似ているのでは？」と聞いた。いただいた答えは「よく分かりましたね。精神は同じです」。堅く言えば自然との共生ということになるが、奥は深かった。

私たちの周りには空があり、大地があり、海がある。水や空気は人類が誕生する前から、私たちが生まれた時からあるので、誰しも普段はその恩恵にことさら感謝はしない。

だが、水や空気、土、植物など自然界に存在するありとあらゆるモノ全てを、人間は作り出すことはできない。当たり前であって、実は当たり前でないことに私たちは鈍感だ。

古くから人類の知恵として大自然の前では自分たちの力を過信することなく感謝し、足るを知ることこそ人間にとって一番の幸せ―。そう感じるための知恵の一つとして、祭りやしきたりがあったのではないかと、ふと思ったりする。

神への感謝、自然との共生の中で生まれた〝フラ〟と〝神楽〟。一見違うようで同じその精神こそ、誇りうる人類の知恵の結晶ではないか。古くから人類は人種や場所を越えて自然の恩恵に感謝し、その恐ろしさをも受け入れ、畏敬の念を持ちながら〝足るを知る〟生活を営んできたんだなぁと思う。

伯耆大山は霊山である。ブナ材は建築に向かないということで、全国各地でブナ林が消滅していく中、大山のブナ林は霊山ということもあり守られた。

近年になって、ブナ林には通常以上に保水力があり、ミネラルたっぷりのきれいな水を生む大きな役割があることが分かってきたという。時に自然の前では人間の小さな考えは無力だ。大山は景色がきれいなだけではない。その〝中身もすごい！〟のである。

隠岐の古典相撲も同じ。相撲がなぜ、国技かということがよく分かり、相撲が日本という国のあり方までも示唆していると言ったら、言い過ぎだろうか。

奥出雲のたたら製鉄も神事。金屋子神を祭り、世界一の鉄を生み出す。自然の中にある砂鉄と炭だけを使い、三日三晩かけて鉄を造る。まさに自然の力であり、神の恩恵なのだとお話しくださった日刀保たたらの木原明村下（むらげ）の言葉に、日本人としての誇りを感じた。

日本を誇りに思える映画作り―。出雲大社の本殿遷座祭の年に臨める幸せを感じながら綿々と受け継がれていくことの重さと価値、日本という国の奥深さにあらためて気づかされるとき、私はやっと映画監督としての本当のスタートラインに立てる気がするのだ。

＝第4金曜に掲載＝

映画「渾身」より　正三役の土俵入り